

『枕草子』における「唐鏡」考

——「心ときめきするもの」章段を中心に——

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 張 培華

『枕草子』「心ときめきするもの」章段は、三卷本、能因本、前田家本、堺本の四系統本文が存在する。また加藤盤斎（一六二一～一六七四）が校正した異文があることは知られている。

本稿では、この章段のうち、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に関する代表的な加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』（延宝二年（一六七四）五月）の「うれしき心」と北村季吟（一六二五～一七〇五）『枕草子春曙抄』（延宝二年（一六七四）七月）の「哀れなころ」の解釈について検討する。「心ときめきするもの」として、「唐鏡のすこし暗き、見たる」という真相を究明する。

盤斎と季吟がほぼ同じ能因本系統本文による校正した本文には、盤斎が校正した本文には見えない異文が、季吟の本文には見えないことに注目し、これに三卷本、前田家本、堺本の本文を比較して検証することにより、特に「暗き」と「曇り」の本質を説明し、盤斎の「くらきみいでたる」に拠る「うれしき心」と季吟の「曇り」に拠る「哀れなころ」と解釈する原因と理由を明らかにした。

そして、「うれしき心」に従う「暗き鏡」を注目し、日本と中国古典における鏡についての表現を考察した結果、唯一の唐代伝奇小説『古鏡記』において「宝鏡」は、暗き特徴があることは明らかである。したがって、「心ときめきするもの」章段の「唐鏡」が、唐代伝奇小説『古鏡記』『宝鏡』を指すことは、「うれしき心」と「心ときめき」の原義と一致する。

「唐鏡のすこし暗き、見たる」という意図の真相は、唐代伝奇小説『古鏡記』

による「宝鏡」の典拠である。「唐鏡のすこし暗き、見たる」の解釈は、「心配」ではなく、理想的な「宝鏡」と思い期待する「心ときめきする」心情を表すのである。

『枕草子』「心ときめきするもの」章段は新たな「うれしき心」と読むことが可能である。また、『枕草子』における難解部分を解明するときに、漢文学からの影響について不可欠な視点と考えることが可能になってくる。

キーワード：枕草子 唐鏡 うれしき心 唐代伝奇小説 古鏡記 宝鏡

- 一. はじめに
- 二. 四系統本文における「唐鏡」に関する表現
- 三. 研究史による「唐鏡」に関する解説
- 四. 平安文学における「唐鏡」及び「鏡」と漢籍の影響
- 五. 唐代伝奇小説『古鏡記』による「暗い鏡」——「宝鏡」
- 六. おわりに

一・はじめに

『枕草子』における漢文学の影響は、漢詩の直接引用、典故の暗示などの分析を通じて、これまでも多くの論が積み重ねられてきた。本稿は、「心ときめきするもの」段を中心として、そこに漢文学の影響が現れているかどうかを考えたい。

該当段は、諸本全四系統三卷本、能因本、前田家本、堺本には、いずれも存在する。論述の便宜上、現在多くの論文に引用されている三卷本文により示す（以下同）。

心ときめきするもの 雀の子飼。ちご遊ばする所の前わたる。よき薫物たきて一人臥したる。唐鏡のすこし暗き、見たる。よき男の、車とどめて、案内し問はせたる。頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にても、心のうちは、なほいとをかし。待つ人などある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる（新編日本古典文学全集）（六九〜七〇頁）

清少納言は、七つの場面で、「心ときめきするもの」すなわち、心に惹かれる瞬間の心情を表している。これらの場面について、過去の研究では、どのように解釈されてきたのだろうか。以下に整理して、確認してみたい¹⁾。

① 雀の子飼

「その無邪気な様子に心がひかれるのである」（池田亀鑑）とあり、また「あまり小さいので、これが育つかしらと、心配してどきどきするが期待を持っている」（田中重太郎）との解説もある。

② ちご遊ばする所の前わたる

「幼児を遊ばせている家の前を車で通り過ぎる時、一瞬の風景が心

を暖かくする」（増田繁夫）という解説があり、また「牛車にひかれはしまいかと心配する」（田中重太郎）という解釈もある。

③ よき薫物たきて一人臥したる

「数種の香を色々に組み合わせて作った練り香」（石田穰二）という説明があり、また「何か良い事が起りそうなのである。話し相手などが居るとこういう気持は生じない」（渡辺実）という解説も見える。

④ 唐鏡のすこし暗き、見たる

「舶来の貴重な鏡。これに曇りが出はじめた。やがてひどく錆びてしまうのではないかと、未来は絶望につながって、胸もつぶれる思い」（萩谷朴）と解釈されている。しかし、「唐鏡の少し暗き見たる」は、よく分らない。通説は、秘蔵の鏡の曇つたのを発見した時、とするが、言葉の解釈に少々無理があるようである」（石田穰二）という説明もある。

⑤ よき男の、車とどめて、案内し問はせたる

「取次を申し入れて（＝案内し）何か尋ねさせている時。「よき男」が何の用かとの期待」（渡辺実）であり、また「果して自分を訪ねてきてくれたのかどうか、誰に何の用件があるのだろうか」と、屋敷内の若い女性は、わくわくする」（萩谷朴）との解説もある。

⑥ 頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にても、心のうちは、なほいとをかし

「お化粧をし、着飾った女性が、鏡の前でひとりほほ笑んだり、眉をひそめたり、自分に話しかけたり。夢と期待に満ちたナルシズムがそこにはある」（萩谷朴）という解釈があり、また「自分のために自分を装う内的な幸福感」（松尾聰・永井和子）という解説もある。

⑦ 待つ人などある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる

「待人が訪れたのかと」(渡辺実)注釈があり、また「恋人の訪れを待つているような夜」(萩谷朴)との解説がある。

七つの場面に対する解釈を取り上げて見た。これらの解釈では、①と②は、いずれも「心配」と「心配ない」という両説が見える。つまり①「雀の子飼」と②「ちご遊ばす所の前わたる」は、必ずしも「心配」するとは言えない。また、③、⑤、⑥、⑦の解釈には、「心配」という解釈が見えない。このように考えると、「心ときめきするもの」の章段の主旨は、「心配」ではなく、すべて良いことに解説することが可能になるとすると、大きな問題となってくるのは、④の解釈である。前掲したように、④の解説には、「曇り」や「錆び」また「未来の絶望」と指摘され、

四系統	本	文
三巻本	からか、みのすこしくらき見たる	からか、みのすこしくらき見たる
能因本	からか、みのすこしくらき見たる	からか、みのすこしくらき見たる
前田家本	からか、みのすこしくらき見たる	からか、みのすこしくらき見たる
堀本	からか、みのすこしくらき見たる	からか、みのすこしくらき見たる
翻字	からか、みのすこしくらき見たる	からか、みのすこしくらき見たる

他説は認められなかった。

本稿は、この「唐鏡のすこし暗き、見たる」という表現は、「曇り」や「心配」ではなく、「心のうちは、なほいとをかし」のような「心ときめきするもの」に解釈することができるのではないか。この問題について、漢文学の影響の視点から解明してみたい。

二・四系統本文における「唐鏡」に関する表現

周知のように、古典文学を解釈するとき、極めて重要なことは本文である。本章段「心ときめきするもの」の本文については、諸本全四系統の本文が存在する。論述のため、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に関する三巻本、能因本、前田家本、堀本の本文を表にして、対照してみたい(上図表)。(2)

四系統本文を比べてみると、次のような異同がまとめられる。まず、三巻本と能因本の本文はほぼ一致。ただ、三巻本には仮名表記された「見たる」の「み」は、能因本では漢字で「見」である。次に、前田家本には、冒頭文「か、み」の前に「から」が見えない。それ以外の本文は三巻本と合致する。また、堀本は、前半の「からか、み」は、三巻本、能因本と一致するが、後半の本文は、いずれも三巻本、能因本、前田家本の「くらき見たる」と違い、「くもりたる見たる」である。

以上の異同点について、さらに一覧表にしてみよう。

四系統	唐鏡の	すこし	暗き	見たる
三巻本	からか、みの	すこし	くらき	見たる
能因本	からか、みの	すこし	くらき	見たる
前田家本	か、みの	すこし	くらき	見たる
堀本	からか、みの	すこし	くもりたる	見たる

右に示したように、四系統本文の大きな相違点は、三巻本、能因本、前田家本の「くらき」と堺本の「くもりたる」という表現の違いである。

注意したい焦点は、「くらきみたる」と「くもりたるみたる」という微妙な違いである。二つの語彙の表現する意味は、いずれも「暗い」であるが、「たる」という助動詞があることから見ると、「くもりたるみたる」ということは、既に「くもり」になった事実に断定することができる。しかし、「くらきみたる」の場合は、既に暗くなったのか、それとも暗くなる瞬間に見たのか容易に判断することはできない。

このようにみると、三巻本、能因本、前田家本の「くらきみたる」より、堺本の「くもりたるみたる」本文は、現代読者にとっては分かりやすい本文である。しかし、他の三系統の本文には断定助動詞「たる」がないことに注意する必要がある。

では、この部分に対して、先行の研究では、どのように言及されてきたのだろうか。次項で確認してみたい。

三、研究史による「唐鏡」に関する解説

『枕草子』の研究史を溯ると、古い注釈には、近世の加藤盤齋と北村季吟の注釈がある。盤齋と季吟は、「唐鏡」について、それぞれの次のように述べている（傍線は筆者が付けたものである）。

○加藤盤齋『清少納言枕双紙抄』（延宝二年（一六七四）五月）

からの鏡のすこしくらき見いでたる。

【からのかゞみ】とは、うれしき心をいふ心を也⁽³⁾。

○北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年（一六七四）七月）

からのかゞみのすこし（くらき）見・たる

からのかゞみのすこしくらき 唐鏡也。いみじき鏡を哀（哀レ）今少明ラか

なれかしと思ふこゝろなるべし⁽⁴⁾。

右に傍線を付けたように、盤齋と季吟の解釈は違う。盤齋の解説は「うれしい」という気持ちであり、季吟の解説は「うれしい」ではなく、大切な鏡に曇って口惜しく「哀れ」である。なぜ二人の解説は、「対立」しているのか。

先行研究によると、盤齋と季吟が校訂正した本文は、いずれも能因本系統本文である⁽⁵⁾。同じ能因本系統本文であるのに、盤齋と季吟の本文は異なる部分が存在している。例えば、前に挙げたように、盤齋の本文の「くらき見いでたる」のうち、「いで」という語は、季吟の本文には見えない。また、季吟の本文の「くらき見たる」の傍には「くもりたる・辰」という注記が施されている。この「くもりたる」という表現は、前述の如く、堺本系統本文である。ところが、この注記は、盤齋の本文には記していなかった。

以上のことから、二つの疑問が浮かび上がってくる。一つは、盤齋の本文に見える本文は、季吟の本文には見えず、盤齋が見た本文を、季吟が見たのか、それとも見たが重視していなかったのか。もう一つは、盤齋が堺本系統本文を見たのかという疑問である。

盤齋と堺本系統本文との関係については、盤齋自身が書いた「奥書」が参考となる。

此本者佐野満雅持来してけるを見るに世に流布の本とはかはりて少異なるゆへに写もて行に書写のあやまりと見えてあやしき所略あり然とも筆そめて次第として功終畢

承応四年八月晦日

信秀書生わかのみちにこころさしふかくありける故に大原にこも⁽⁶⁾

りてありし時かき侍るをみいてておくりぬるなりまくら草紙異本あり
またありこれは幽斎法師のもてあそひ給ふ本の写なり

寛文元年八月廿日

盤齋⁽⁷⁾

承応四年(一六五五)、盤齋は佐野満雅が持来した堺本系統異本を書
写した。その後、寛文元年(一六六一)信秀という人がさらに異本を持っ
て来て、盤齋がさらに書写したのである。盤齋が極めて早い時期に、堺
本系統異本を書写したことが分かった。しかし、後に盤齋が校正した『清
少納言枕双紙抄』本文には、特に「唐鏡」に関して、堺本系統異本につ
いて注記をしていない。盤齋と季吟は、堺本系統異本に関して取捨する
態度が違うことは分かる。

次に、盤齋が校正した本文の「くらき見いでたる」のうち、「いで」
という語は、季吟の本文には見えない。この点に示唆されたことは、盤
齋が見た本文を、季吟が見たのだろうか、それとも見たが重視していな
かったのかということである。

かつて、盤齋と季吟の、本文に対する忠実さについて、川瀬一馬は次
のように述べている。

今回は盤齋抄を本書の底本とすることにした。これは枕草子の流布
本となつてゐる北村季吟著の「枕草紙春曙抄」(延宝二年刊)とほ
ぼ同系統の本文であるが、春曙抄よりも本文をいじつていないと思
われる⁽⁸⁾。

以上のように、盤齋と季吟の、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に対す
る解釈には、それぞれ「うれしい」と「哀れ」と解釈された理由は、各
自の依拠した本文が違うことがあることが分かる。すなわち、盤齋が校

正した本文「くらき見いでたる」であり、季吟が堺本系統本文「くもり
たるみたる」である。

では、盤齋と季吟以降、現在に至るまで、「唐鏡のすこし暗き、見たる」
に関しては、如何に解釈されてきたのだろうか。これを次のように確認
してみたい。

周知のように、明治以降、昭和から現在に至るまで、多くの『枕草子』
底本は、三卷本系統本文を利用している。例えば、三卷本底本により、
日本古典文学大系『枕草子』(岩波書店)で、池田亀鑑は、次のように
述べている。

大切な鏡にすこし曇りが生じたのを見出して心ときめきされる意な
りと解し、それが大體通説となつてゐる。しかし、鏡に曇りを発見
して驚く心は「心ときめき」よりむしろ「胸つぶる」の語で表現さ
れるべきであらう⁽⁹⁾。

池田亀鑑は、「曇り」という解釈は相応しくないと指摘されている。
その理由は、「心ときめき」の章段と「胸つぶる」の章段の内容が違う
からである。続いて、池田亀鑑は、次のように説明している。

胸がときめくことで、何かを予想し期待するとき心が自然に動く状
態についていう。未知または未然の事態への予想なので心の動揺は
さげ得ないが、悪いことについては用いられない。その点「胸つぶる」
の語と対照的である⁽¹⁰⁾。

そして、池田亀鑑は、「唐鏡のすこし暗き、見たる」について、次の
ように解説した。

かつて私見として、上等な鏡だというのに曇りが出ているのを見た時は、思わず苦情をいいたくなって自制できないとの解釈を提出したが、なお考えるのに、「くらき」を陰翳をおびた状態と解し、上等な鏡への心ときめきととることもできるように思う⁽¹¹⁾。

しかし、池田亀鑑の解説は、田中重太郎に認められなかった。田中重太郎は、能因本底本として『枕冊子全注釈』の中で、池田亀鑑の解説については、次のように反対している。

池田亀鑑氏は「悪いことについては用いられない。その点『胸つぶる』の語と対照的である」（『大系』頭注）と説かれたが、「心ときめきする」を「胸つぶる」とあまり対照的に見ようとするとともに無理があるようで、この冊子の「胸つぶるるもの」と読み比べると、この二つの語にはそうした要素もあるが、程度の差ということも考えられるし、「心ときめきす」には、期待と不安が入りまじっている⁽¹²⁾。

文字の如く、田中重太郎は「心ときめき」の意味は、「期待と不安」として理解するべきと指摘されている。田中重太郎は、「悪いことについては用いられない。その点『胸つぶる』の語と対照的である」という池田亀鑑の解説に対して、「無理がある」と反発している。

田中重太郎の「反発」した理由は、恐らく池田亀鑑の「唐鏡」に関する解釈が適切ではなかったからであろう。田中重太郎は次のように説明している。

池田亀鑑氏は「鏡に曇りを発見して驚く心は『心ときめき』よりむしろ『胸つぶる』の語で表現されるべきであろう。（中略）『くらき』

を陰翳をおびた状態と解し、上等な鏡への心ときめきととることもできるように思う」（『大系』補注）と説かれるが、前にも述べたように、これは「心ときめきする」と「胸つぶる」と、あまりに対照的に見ようとするとともに、無理があるようである。ここは、舶来のたいせつな鏡が曇っているのを見て、はっとした瞬間の気持をいったものと、すなおに解しておくほうがよい⁽¹³⁾。

田中重太郎は、池田亀鑑の解釈には「陰翳をおびた状態」で、「上等な鏡への心ときめき」することと「胸つぶる」こととの区別することは、「無理があるようである」と反発している。そして、田中重太郎は、すなおに考えて、「たいせつな鏡が曇っている」状態で、つまり、「不安」の通説のままがよいと解説されている。

その後、田中重太郎の解説と類似する解釈は、萩谷朴の解説である。萩谷朴は『枕草子解環』で、次のように述べている。

高価な舶来の鏡、これに曇りが出はじめた。やがてひどく錆びてしまうのではないかと、未来は絶望にもつながって、胸もつぶれる思いがする⁽¹⁴⁾。

萩谷朴の解釈は、田中重太郎の解説より、具体的に「曇り」を「錆び」と指摘し、「未来は絶望」というような解釈を記した。

しかし、萩谷朴の解説を必ずしも踏襲とは言えず、同じ三巻本底本である新日本古典文学大系『枕草子』頭注で、渡辺実次は次のように記述している。

「唐鏡」は中国製の鏡。「鏡」を「見る」と言えば、顔を映すことだから、これは、舶来の鏡ちよつと曇ったのに顔を映した時の気持で

ある。自分が高貴な美女になったように見える。現実より良い方向にだけはなれた例。「少しくらき」は夜目遠目の類で、共感を呼んだであろう⁽¹⁶⁾。

萩谷朴の解釈と全く違う方向で、渡辺実は、「曇った」鏡を見る時に、「未來は絶望」ではなく、「高貴な美女」になると解釈されている。

以上のように、近世以降、現在に至るまで、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に対して、代表的な池田龜鑑、田中重太郎、萩谷朴、渡辺実の解釈を見てきた。四人の解釈は、二組に分けられる。一組は、池田龜鑑と渡辺実の解釈により悪いことではなく、良いことに惹かれる心情を表すものである。もう一つ組は、田中重太郎と萩谷朴の解釈で、良いことではなく、大切な鏡が曇り錆びになって、不安な心配する気持ちの表現である。

これらの四人の二組の解釈は、近世の盤斎と季吟の説に類似している。すなわち盤斎の「うれしい」（池田龜鑑、渡辺実）気持ちであり、季吟の「哀れ」（田中重太郎、萩谷朴）な心情であろう。ようするに、「唐鏡」に関する解釈については、近世からいままで「二説」の状態であろう。

この二説はどちらが適切であろうか。換言すれば、三巻本、能因本、前田家本の本文による「くらきみたる」と堺本本文による「くもりたるみたる」という表現は、どちらが適切であろう。

前述の如く、堺本本文による「くもりたる」異文には、断定助動詞「たる」があることから、七つの場面のうち、断定された事実が見える描写は、前後文脈から見ると、相応しくないと考える。また、周知のように、堺本系統本文の信憑性の問題があるということは注意しなければならぬところである⁽¹⁶⁾。とすると、三巻本、能因本、前田家本の本文による「くらきみたる」に従って解釈するべきと思われる。

私見によれば、この「唐鏡の少し暗き、見たる」という描写は、短く

詩句のような特徴が見え、何か唐の鏡に関わる「暗き」の典故があるのではないだろうか。あるいは、この「唐鏡」に関する発想は、唐の文学との関係があるのではないかと考える。そこで、「唐鏡」と漢籍の関係について展開してみたい。

四. 平安文学における「唐鏡」及び「鏡」と漢籍の影響

唐鏡は、元來漢鏡と並んで中国で特殊な発展を遂げた金属鏡の主要なもので、宋代の『博古図録』以来、古鏡と名称されている。奈良時代には、大量の唐鏡が日本に輸入され、各地で出土するが、多種多様の唐鏡の優作が伝世している。例えば、正倉院に伝世されるこれらの鏡はもろんの事、奈良県高松塚古墳出土の海獸葡萄鏡は中国本土ではいまだ例を見ないものである。七世紀後半から平安中期まで、唐鏡に模倣して作られた鏡は、「唐式鏡」と呼称されている⁽¹⁷⁾。

該当段「心ときめきするもの」において「唐鏡」は、輸入された「唐鏡」であろうか、それとも日本で唐の様式に作られた唐式鏡であろうか。容易に判断することは難しい。ただ、いずれにしても、この「唐鏡」は、唐との間に何か関係があることは察せられる。おそらくこの鏡は、唐の文学における鏡と関係があるであろう。なぜなら、日本古典文学における鏡の表現は、中国の文学との関係が深いからである。この点について、確認してみたい。

最初に、『風土記』『常陸国風土記』『久慈の郡』の記事を取り上げたい。

東山石鏡 昔在魑魅 萃集甃見鏡 則自去 俗云疾鬼 面鏡自滅
東の山に石の鏡あり。昔、魑魅あり。萃集りて鏡を甃び見て、すな
わち自ら去る。俗、疾き鬼は鏡に面へば自ら滅ぶといふ⁽¹⁸⁾。

漢字で書かれた「魑魅」については、本書頭注で、「人面獸身、四足

にして好く人を惑はす」(史記注)という怪物の称」と書かれている。だが、この「怪物」が、鏡を見て逃げるといふ描写は興味深いところである。このような故事が、漢籍『抱朴子』にも見られる。

是以古之入山道士 皆以明鏡径九寸已上 懸於背後 則老魅不敢近
人或有人試人者 則當顧視鏡中 其是仙人 及山中好神者 顧鏡中
故如人形 若是鳥獸邪魅 則其形貌 皆見鏡中矣⁽¹⁹⁾

昔、山に入る道士たちは皆な、直径九寸以上の鏡を背後に吊していた、こうすれば劫を経た魅もひとに近づけない。胆を試そうとしてやって来るものがあれば、ふり返って鏡の中を見よ。相手が仙人あるいは山中の良い神なら、鏡の中を見ると人間の姿のまま映る。もしそれが鳥や獣の悪い魅だったら、その顔かたちすべてが鏡の中に映る⁽²⁰⁾。

右の描写を比べてみると、いずれも悪い「魅」というものが、鏡に近づかないで、見て去るといふ類似する表現は、漢籍の影響があることと考える。

次に、平安初期勅撰三集のうち、『文華秀麗集』(日本古典文学大系)に収録された嵯峨天皇の(滋野貞主の「秋月歌」)に唱和した御製「和內史貞主秋月歌」には、次のような鏡に関わる詩句がある(現代漢語で表記)。

雲暗空中清輝少 雲暗く空中に清輝少く
風来吹拂看更皎 風来りて吹き拂ひ看更に皎らかなり
形如秦鏡出山頭 形は秦鏡の如く山頭を出で
色似楚練疑天曉 色は楚練に似て天の曉くるかと疑ふ

(三〇六～三〇七頁)

右の詩句に引用されている「秦鏡」というものは、空海の『三教指帰』(日本古典文学大系)にも、次のように見える(現代漢語で表記)。

吾当為汝等 略述綱目 宜鑒秦王顯偽之鏡 早改葉公懼真此迷 俱
醒触象之醉 並学師吼之道
吾当に汝等が為に略綱目を述べむ。宜しく秦王を偽を顯はす鏡を鑒
みて、早く葉公が真を懼づる迷を改め、俱に触象の醉を醒して並び
に師吼の道を学ぶべし。
(二二六～二二七頁)

上の文には、いくつかの中国の故事を引用している。文字のように、秦王の鏡は、秦の朝廷の鏡に関わる故事である。「葉公」という人が、竜が好きで、本物の竜を見て失神気絶したという故事である。これらの「秦鏡」と「葉公」を、空海は『性靈集』「巻第一」の「遊山慕仙詩」にも用いられている。

葉公珍假借 葉公假借を珍とし
秦鏡照真相 秦鏡真相を照らす
(二五八～二五九頁)

右に示したように、「葉公」という故事は、元來漢の『劉向新序』による説話である。「秦鏡」は、秦の始皇帝に関する鏡である。この「秦鏡」は、横が四尺、高さが五尺九寸、いずれも表と裏が見られる。手を心の上に置いて見ると、腸や胃や肺などが見える。病気になる時、心を押ししてみると、その病因が分るといふ⁽²¹⁾。

次に、菅原道真『菅家後集』(日本古典文学大系)「秋夜九月十五日」の詠作には、次のような鏡に関わる詩句が見える(現代漢語で表記)。

昔被栄花簪組縛 昔は栄花簪組に縛がれき
 今為貶謫草菜囚 今は貶謫草菜の囚たり
 月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし
 風氣如刀不破愁 風の気は刀の如くなれども 愁へを破ることあ
 らず (四九九〜五〇〇頁)

これらの詩句には興味深いことは、月光のような鏡には「罪」がないということである。『菅家後集』頭注に「我が無実を訴えたいというはげしい願望がこもる」と注釈されているが、なぜ鏡に「罪」がないのかということは触れてこなかった。これは恐らく菅原道真是漢籍の典拠を援用したのではないであろうか。このような明鏡に罪がない故事は、『韓非子』「觀行第二十四」に見える。

古之人 目短於自見 故以鏡觀面 智短於自知 故以道正己 故鏡
 無見疵之罪 道無明過之怨 目失鏡 則無以正鬚眉 身失道 則無
 以知迷惑⁽²²⁾

昔の人は、目には自分の顔を見るのが難しいからとて、鏡を用いて顔をみることにした。また知る力も自分のことを知るには十分でないからとて、道を定め、これを用いて己れを正しく保つことにした。故に鏡が物の欠点を照らし出すことは罪でなく、道に由ることなしには、正しい判断ができず迷うのである。

上のように、「明鏡」は罪がないという故事を、菅原道真是享受されているだろう。

漢詩句だけではなく、真名で書かれた仏典及び説話における鏡の表現について、漢籍の故事との繋がりが見える。例えば、『大日本国法華経験記』には、源信僧都の修行について、次のような記事がある。

夢見 堂中有藏 其中有種々鏡 或大或小 或明或暗 爰有一僧
 取一暗鏡與之 小兒陳云 此小暗鏡中何用乎 欲得彼大明鏡 僧答
 云 彼非汝分 々々是也 持至横河 加磨云々 夢覺⁽²³⁾

右文は、『今昔物語』にも収録されている。

夢二見ル、「堂ノ中ニ蔵有リ。其ノ蔵ノ中ニ様様ノ鏡共有リ。或ハ大キ也、或ハ小サシ。或ハ明ラカ也、或ハ暗タリ。其ノ時ニ、一人ノ僧出来テ、暗タル鏡ヲ取テ、源信ニ与フ。源信、僧ニ語テ云ク、『此ノ鏡小クシテ暗タリ。我レ何ニカセム』。彼ノ大キニテ明ラカナル鏡ヲ取テ、源信ニ与フ、『彼ノ大キナル明キ鏡ハ汝ガ分ニハ非ズ。汝ガ分ハ此レ也。速ニ比叡ノ山ノ横川ニ持行テ、可磨瑩キ也』ト云テ、与フ」ト見テ、夢覺又⁽²⁴⁾。

右にあげたように、「暗鏡」を「加磨」という比喩について、『北堂書鈔』「鏡」項目には「磨鏡取資」という故事が見える。この故事は、徐孺子という人が、貧乏で、鏡磨きで賃を稼ぎ、後に成功したという。この故事の寓意を示唆するため、源信に「暗鏡」を渡され、自分で努力することを暗示したと考えられる。

また「暗鏡」に対して、「明鏡」という表現は、漢籍には常に見える描写であろう。例えば、『淮南子』「卷二俶真訓」には、次のように見える。

人莫鑑於流沫 而鑑於止水者 以其静也 莫窺形於生鐵 而窺於明鏡者 以其易也

人が流水を鏡とせず、止水を鏡とするのは、それが静かだからである。粗鉄に姿をうつすことなく、明鏡にうつすのは、それが平らだからである⁽²⁵⁾。

右に示したように、流れる水は鏡にならない、粗末な鉄に姿を映すこともできない。人が本性に戻る方法は、止まれる水が「明鏡」になると同じように、人の身を修める方法は「静」である。

文字の通り、「明鏡」は優れる特性があるゆえ、詩語として、人間の美德を比喻する表現も見られる。例えば、『和漢朗詠集』（日本古典文学大系）に収録された野相公の詩句は、次のように見える。

明鏡乍開隨境照 明鏡乍ちに開けて境を随ひて照す

白雲不著下山來 白雲は著かず山より下りて來る (二〇五頁)

以上のように、文学作品における鏡の意味は、日常の顔を映すだけ道具ではなく、人間の優れる知恵、美德などの性格を比喻する表現である。また、平安時代における史書の名称による「鏡」についても、注意したところである。例えば、『大鏡』という名称における中国文化からの影響については、すでに様々な論考があることはいうまでもなく、ここでは、二例の漢籍の歴史の鏡に関する例を取り上げてみよう。まず『孔子家語』には、次のような名句がみえる。

夫明鏡所以察形 往古所以知今

明鏡は形をはつきりと写し出すもので、往古は、現在を理解する手段である⁽²⁶⁾。

次に、『旧唐書』には、唐太宗（五九九〜六四九）に関わる「三鏡」という有名なエピソードが、次のように記されている。

夫以銅為鏡 可以正衣冠 以古為鏡 可以知興替 以人為鏡 可以明得失 朕常保此三鏡 以防己過 今魏徵殂逝 遂亡一鏡矣⁽²⁷⁾

唐太宗は、常に三つの鏡をご用意になる。一つは朝服を整理する銅鏡であり、二つは時代を変える興衰を知るための歴史の鏡であり、三つは自らの過失を知るための人の鏡である。この「人の鏡」は魏徵である。魏徵が急に逝去した。「三鏡」のうち、一つの鏡は亡くなったと唐太宗皇帝は悲嘆している。

右のエピソードは、『貞觀政要』「卷二任賢第三」にも見える。唐太宗としては、鏡の効用は三つである。衣服を調整する鏡、時代を知る歴史の鏡、自らの欠点を知る人の鏡である。

周知のように、白楽天の「百鍊鏡」という詩作は、唐玄宗皇帝に関する鏡の故事を援用して作られた作品である。この「百鍊鏡」詩が、『白氏文集』「卷四」「新樂府」に収録されている。

「百鍊鏡」という由来について、唐玄宗の時、揚州の銅をもち、船の中に鑄られたものである。唐玄宗は「百鍊鏡」を珍視し、祖の唐太宗のような英明に天下治まりという。全詩は長いので、ここでは、唐太宗に関する典拠の部分を取り上げてみたい。

太宗常以人為鏡 太宗常に人を以て鏡と為たまふ

鑒古鑒今不鑒容 古を鑒み、今を鑒みて容を鑒みたまはず

この詩は、平安貴族は熟知しているはずであろう。なぜなら、右に挙げた二句の後に続けた詩句は、『和漢朗詠集』（日本古典文学大系）「下巻」「帝王」篇に収載している（現代漢語で表記）。

四海安危照掌内 四海の安危は掌の内に照し
百王理乱懸心中 百王の理乱は心の中に懸けたり

(二二八頁)

漢詩文のみならず、仮名文学における鏡の表現にも、漢籍との関係が見える。例えば、『源氏物語』「賢木」巻、源氏は、次のような「鏡」の和歌を詠まれている。

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき²⁸

厳冬に凍っている池の水面は鏡のようである。おみなれ申した院の面影を拝見することのできないのが悲しいという心情を表している。このような池の鏡の和歌は、『大和物語』（日本古典文学大系）第七十二段にも見える。「池は猶むかしながらの鏡にてかけみし君がなきぞかなしき」。池の面は、昔のままに、鏡のようだが、そこに姿を映されていた宮様がもはやおいでなされないのは悲しいことだ（二六五頁）。

この「池の鏡」という表現は、唐詩では、池を鏡に比喩する詩作が見える。例えば、白楽天が大和四年（八三〇）五九歳に書かれた「看採菱」〔白氏文集〕第二八卷律詩〕の冒頭詩句に、「菱池如鏡浄無波 白点花稀青角多」があり、また張説「奉和聖製同玉真公主遊大哥山池題石壁」には、「池如明鏡月華開 山学香爐雲氣来（池は明鏡の如く、月華を開く。山は香爐のように、雲氣を来る）が見られる。

『枕草子』における「鏡」の用例は六箇所。本章段以外の四例は、日常の道具であるが、「鳥は」章段の一例は漢籍との関係があることが、すでに先行の研究で指摘されている。念のため、本文を確認してみよう。

山鳥、友を恋ひて、鏡を見すれば、なぐさむらむ、心わかう、いとあはれなり。
(九五頁)

この山鳥が、鏡を見て自分で踊るといふ説話については、過去の研究に指摘されたように、中世の歌学書類に種々見える。例えば、「山鳥は

めをとこ一つ所には寝ず、山の尾を隔ててぬるに、暁にを鳥のはつ尾にめ鳥の影の映るを見て鳴けば、それをはつをに鏡かくとは云なり」（袖中抄十二）がある。山鳥と鏡の話は、大江朝綱「為清慎公辞右大臣、第三表」にも「山鶏ノ円鏡二対フニ類ス。舞ヒテ何ニカ為ン」（本朝文粹、五）と見える。ただし、『袖中抄』にいう二種の用法はいずれも漢籍を典拠とするものであるが、前者は『芸文類聚』鳥部の「山鶏」に引く諸話などによったものであり、後者は同じく「鸞」の話につながるものであると増田繁夫はこのように述べている²⁹。

『芸文類聚』第九十一巻「鳥部中」「山鶏」項目には、次のような故事がある。『異苑』によると、ある山鶏は自らの毛が好きで、水に映してそれから踊る。後に、魏武の時、鶏を皇帝に献上した。公子蒼舒は人に大きな鏡を鶏の前に置いた。そして、鶏が鏡を見ながら、踊りは止まらず、疲れて死んでしまったという。

以上、いくつかの鏡に関する漢籍との関係がある表現を提示してきた。文学における鏡の意味は日常用の道具より真実を言う、偽装を識別、歴史を見るなどの寓意に注目したい。大谷雅夫は次のように述べている。

中国の文学における鏡は、化粧道具としての鏡そのものを言うか、静かな水面の譬喩か、または、虚心ゆえに万事に融通無碍に応え、自らは損われないという聖人の心を譬える表現であった。それは、鏡を生活に実用した上に、それを自然描写にも、思想の表現にも応用した、いわば文明人としての鏡の見方なのであった³⁰。

このように、本章段「心ときめきするもの」による「唐鏡の少し暗き、見たる」において「唐鏡」の解釈は、唐の文学における鏡の典拠について考えたい。

五 唐代伝奇小説『古鏡記』による「暗い鏡」——「宝鏡」

周知のように、唐代文学と言うと、多くの作品は、いわゆる「唐詩」である。唐詩における「鏡」については、前述した如く、鏡に関わる故事、典故などが援用されている。ここで、注目したいことは、唐詩における「鏡」ではなく、唐代伝奇小説に書かれた「鏡」である。見出しに示したように、『古鏡記』という伝奇小説には、「宝鏡」という鏡がある。興味深いことは、この「宝鏡」に「暗い」という特徴があるからである。いったい、この鏡はどのようなものだろう。次のようにまとめてみよう。

『古鏡記』作者の王度は、隋と唐の両朝代に関わる人物である。『古鏡記』によると、最後の年次は、大業十三年（六一七）、隋朝滅亡の直前であり、翌年（六一八）は、李氏父子（李淵「高祖」と李世民「太宗」）が、唐を建国した年である。『古鏡記』は最初に唐の末期に編纂された『異文集』に収録されている。唐の顧況が『戴氏広異記序』に、唐の「国書」一種「王度古鏡記」と記している⁽³¹⁾。

作者王度は、隋の汾陰の侯先生から、一つの古い鏡を買った。この鏡は、人間を侵害する妖怪を識見することができるので「宝鏡」という。大業七年（六一一）から大業一三年（六一七）まで、様々な場面で、この鏡の神奇的なことが行われている。たとえば、「鸚鵡」という婢は、宝鏡で照らして、この人間の姿として婢が、実に華山の松の下の「千歳老狸」であった。また夜の暗い部屋に、宝鏡を置くと、昼のように光が輝く。また、宝鏡は太陽の光を取って壁の裏まで射すことができ、照らしたところ、芮城の庁の前の何百年、棗木の下に妖怪、白い角、頭が緑の大蛇を殺すこともできた。さらに、同年の冬、病疫が甚だ流行なので、しかし、宝鏡を感染した病人に照らすと、すべての病気を治すことができた。

このように、この「宝鏡」は不思議な鏡であった。留意したいことは、

この不思議な宝鏡は、特有な「個性」がある。それは「暗く」なる特性である。この「暗さ」については、原文で確認してみよう。

大業八年四月一日 太陽虧 度時在臺直 書臥廳閣 覺日漸昏 諸吏告度以日蝕甚 整衣時 引鏡出 自覺鏡也昏昧 無復光色 度以寶鏡之作 合於陰陽光景之妙 不然 豈合以太陽失曜 而寶鏡也無光乎 嘆怪未已 俄而光彩出 日亦漸明 比及日復 鏡亦精明如故 自此之後 每日月薄蝕 鏡亦昏昧

大業八年の四月一日には、日蝕があった。私はその時、御史台の当直であった。昼間役所の部屋に寝ころんでいて、太陽が次第次第に暗くなるのに気がついた。役人たちがひどい日蝕だといって私に知らせにきた。起きあがり着物をきちんと着ようとして、鏡を引き出したところ、鏡もやはり暗くなって、以前のような光のないのに気がついた。私は思った、宝鏡の作り方は、日月の光の靈妙なはたらきと合致させてあるのだ、そうでなければ、どうして太陽が光を失うことによって、宝鏡も光がなくなるようなことがあると、この不思議に感嘆しているうちに、ほどなくうるわしい光が出だすと、太陽も次第に明るくなってきた。太陽がもとにもどった時には、鏡ももとのように光りかがやいた。これからのち、日蝕・月食が近づいたに、鏡も暗くなるのであった⁽³²⁾。

右文の傍線に示したように、この宝鏡は「暗い」という特性があることは明かである。この「宝鏡」の特性は、本章段「心ときめきするもの」には、「唐鏡の少し暗き、見たる」という特徴に類従する蓋然性は注目する価値があるであろう。

前に分析した如く、本章段「心ときめきするもの」七場面では、未実現で、希望や期待する心情を表す章段である。作者清少納言は、この「唐

鏡」の少し暗いことを発見して、おそらくこの「唐鏡」は、唐代伝奇小説に書かれたような「宝鏡」であろうかと思ひ、その瞬間の心がどきどきする心情を表現であろう。

ようするに、「心ときめきするもの」において「唐鏡の少し暗き、見たる」という意味も、希望や期待の通り心情を表すことは可能である。すなわち、盤斎の解釈による「うれしい」気持ちであり、渡辺実の「高貴な美女」のように、悪いことではなく良いものに解釈することは可能になる。

しかし、このように解釈するならば、新たな問題を克服することが必要である。それは、作者清少納言は『古鏡記』という唐代伝奇小説を読まれた可能性があるかという疑問である。

この点については、近年から考証されてきた平安文学と唐代伝奇との関わりについてが、参考になると思われる。例えば、池田亀鑑の『源氏物語大成』「宿木」（中央公論社 一九五八）巻には、『長恨歌伝』の引用を指摘することが見え、藤井貞和は、『源氏物語』の「筈木三帖」の物語のいきさつなどを、唐代伝奇の影響であると論じている（『平安物語叙述論』東京大学出版会 二〇〇一）。また田中隆昭は、『源氏物語』と『長恨歌伝』など唐代伝奇の方法——短編から長編へ——論文に、『長恨歌』『伝』の影響のなかから長編への要素——楊貴妃の霊魂と更衣の生れ変りの光源氏・藤壺——が生まれていたと述べている（『交流する平安朝文学』勉誠出版 二〇〇四）。陣野英則は、『源氏物語』における伝承過程での〈書く〉こと、特に書写行為の仮構は、さまざまな点で唐代伝奇の対極にある方法だと論証している（『交錯する古代』（勉誠出版 二〇〇四）。さらに新聞一美は、『源氏物語』登場人物、特に女性の描写する方法視点から、唐代伝奇小説に見える楊貴妃、崔鶯鶯、任氏等の女性の個人的享受を指摘されている（『源氏物語』と白居易の文学）和泉書院 二〇〇三）。

以上のように、唐代伝奇小説は『源氏物語』に与える影響についての論考は認められている。ただし、唐代伝奇小説と『枕草子』との関係、さらには、『古鏡記』との関係は指摘されていない。この点が、この臆測の確度を十分なものにしていないとは言えないことは重々承知の上である。しかし、「鏡」が「暗い」状態が、『枕草子』にしか扱われないこと、それに対して、「心ときめき」することが、漢籍に由来するフィルターを通じて、新たな解釈を産むことの可能性は、否定し得ないのではあるまいか。

六： おわりに

以上、『枕草子』「心ときめきするもの」の章段の「唐鏡のすこし暗き、見たる」を中心に述べてきた。

本章段の四系統『枕草子』の三巻本、能因本、前田家本及び堺本の該当する本文を取り上げて分析し、四系統本文の異文、盤斎と季吟の依拠した本文を検討した。

先行の研究では、「唐鏡の少し暗き、見たる」に関する解釈史の流れを整理した。盤斎の「うれしき心」、季吟の「哀れなころ」における「二説」の解釈は、現在に至るまで存在されている。そこで、盤斎の独自の異文「くらしき見いでたる」と季吟の堺本系統異文による「くもりたるみたる」の解釈の適切さを考証した。その結果、「心ときめきするもの」の主旨に相応しい解釈としては、季吟の「哀れなころ」の解釈より、盤斎の「うれしき心」の解釈が適切と判断した。

また、日本古典文学における「鏡」と漢籍の影響について考察した。『枕草子』「心ときめきするもの」の章段における「唐鏡」に関する表現の、漢籍との影響について、唐の伝奇小説『古鏡記』には「宝鏡」とあり、「暗き」特徴があることを検討した。

あくまで、可能性としての提示にとどまるが、「唐鏡のすこし暗き、

見たる」という意図の真相には、唐代伝奇小説『古鏡記』による「宝鏡」を典拠に想定すると、「唐鏡のすこし暗き、見たる」の解釈は、「心配」ではなく、理想的な「宝鏡」と思い期待する「心ときめきする」心情と読み取れてくるのである。

こうした結果、唐代伝奇小説は『枕草子』に与えた影響については、新たな視点に注目すれば、解釈する価値があるであろう。また『枕草子』における難解な部分を解明するためには、漢文学からの影響が不可欠な方法と考えることが可能になってくる。

注

(1) 本章段に関する注釈によって、取りあげた解釈文は、次のような諸本に拠る。

池田亀鑑『枕草子』日本古典文学大系(岩波書店 一九七二)

田中重太郎『枕草子全注釈』一(日本古典評釈・全注釈叢書(角川書店 一九七二))

石田穰二『新版 枕草子』(角川ソフィア文庫 二〇〇六)

渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系(岩波書店 一九九九)

萩谷朴『枕草子解環』一(同朋舎 一九八一)

松尾聰・長井和子『枕草子』新編日本古典文学全集(小学館 二〇〇四)

(2) 三巻本底本は大東急記念文庫蔵『枕草子』日本古典刊行会複製本に拠る。能因本底本は学習院大学蔵『枕草子』笠間文庫複製版に拠る。前田家本底本は尊経閣文庫蔵の写本の複製本に拠る。堺本底本は、高野辰之旧蔵慶長頃古写本『堺本枕草子』、古典文庫影印本に拠る。また田中重太郎『校本枕草子』(古典文庫 一九七四)及び林和比古『堺本枕草子本文集成』(日本書房 一九八八)に参照した。

(3) 加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』(誠進社 一九七八)一四一頁。

(4) 北村季吟『枕草子春曙抄(扛園抄)』(誠進社 一九七八)一〇一頁。

(5) 中西健治『伝能因所持本』『枕草子大事典』(勉誠社 二〇〇一)七五頁。

(6) この「も」については、堺本諸本による異なる部分がある。例えば、

山井本『清少納言枕さうし』(桃園文庫旧蔵)二冊による盤斎の「奥書」には「大原にこもりて」と記されている。龍門本『清少納言枕草紙』(龍門文庫蔵)上下二冊にも見えるが、無窮会本『異本枕草紙 完』には、「大原にこり」の中には「も」が脱落している。本稿の引用文は、『清少納言枕さうし』により、林和比古『堺本枕草子本文集成』を参照した。

(7) 林和比古『堺本枕草子本文集成』下(日本書房 一九八八)一九五二～一九五三頁。

(8) 川瀬一馬『枕草子』序(講談社 一九八七)三～四頁。

(9) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七二)三三六～三三七頁。

(10) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七二)七二頁。

(11) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七二)三三六～三三七頁。

(12) 田中重太郎『枕草子全注釈』一(角川書店 一九七二)二六三頁。

(13) 田中重太郎『枕草子全注釈』一(角川書店 一九七二)二六三～二六四頁。

(14) 萩谷朴『枕草子解環』一(同朋舎 一九八一)二七五頁。

(15) 渡辺実『枕草子』(岩波書店 一九九九)三七頁。

(16) 堺本系統本文の信憑性については、前掲の四人自身の観点を取り上げてみよう。(張…表記形式は変えるところがあり、傍線も施した。)

① 池田亀鑑『日本文学研究資料叢書 枕草子』(有精堂 一九九一)

但し堺本には、著しい後人の補筆が認められるのであって、現存の形を以って直ちに古い形のままであると断言し難い事は勿論である(『枕草子の形態に関する一研究』七四頁)。

② 田中重太郎『陽明叢書 枕草子 徒然草』(思文閣 一九七五)

いうまでもなく、清少納言枕草子の現存諸本は、池田亀鑑博士の分類せられたように

一 伝能因所持本系統

二 三巻本(安貞二年奥書本)系統

三 前田家本

四 堺本系統(宸翰本を含む)

の四つの系列にわけられる。これら四系統本のうち、三は書写

年時は現存本中最古のものではあるが、後人の改編編纂によることが明らかであり、四も現存本は作者の日記自伝的章段を意識的に省いた略本であるから、一と二とが清少納言枕冊子の主流本ということになる（「枕草子解説」一三頁）。

③萩谷朴『新潮日本古典集成 枕草子』（新潮社 二〇〇〇）

現存塚本は、この古塚本の本文系譜の末流に立つものであることは認められるものの、古塚本が類纂本であったなら、それをそのまま、古塚本が雑纂本であったなら（中略）、雑纂形態であったという伝承にでも基づいて、それを復原しようとの意欲からこれを再編輯し、いずれにもせよ、物名・件名を恣意的に増補したり、難解な本文箇所を任意に添削して、大きく改訂いたした純な伝本であるというの他はない（「解説」四二二頁）。

④渡辺実『新日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店 一九九九）

「元龜元年十一月日」の日付けを持つ「宮内卿清原朝臣」の奥書に、「泉の堺」の道巴という人の持っていた本を写した、ということが記されている所から、塚本と呼ばれる。回想章段を欠くのが特徴である。その本文の大体は、雑纂本の本文に手の加ったものとされる一方、部分的に雑纂本よりも古い性格を残す、とされていて、今後の研究が期待される（「解説」三七七頁）。

(17) 梅原未治『唐鏡大観』（同朋社 一九八四）及び青木豊『和鏡の文化史』（刀水書房 一九九二）に参照。

(18) 秋本吉郎『風土記』（岩波書店 一九七二）八二～八三頁。

(19) 『抱朴子』「諸子集成」第八冊（中華書局 一九九六）七七頁。

(20) 本田濟『抱朴子』内篇（平凡社 一九九〇）三五〇頁。

(21) 『西京雜記』和刻本漢籍隨筆集「十三」（古典研究会 一九七四）に参照。

(22) 竹内照夫『韓非子』上（明治書院 一九七七）三四〇頁。

(23) 藤井俊博『大日本国法華経験記』下 校本・索引と研究（和泉書院 一九九六）八五頁。

(24) 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄『今昔物語』三（岩波書店 一九六一）一七九頁。

(25) 楠山春樹『淮南子』（明治書院 二〇〇八）一一七～一一八頁。

(26) 宇野精一『孔子家語』（明治書院 二〇〇八）一四六～一四七頁。

(27) 『旧唐書』「卷七十一」「列傳第二十一」「魏徵」（中華書局 二〇〇二）二五六～一頁。

(28) 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男『源氏物語』②（小学館 二〇〇六）一〇〇頁。

(29) 増田繁夫『枕草子』（和泉書院 二〇〇二）四〇頁。

(30) 大谷雅夫『歌と詩のあいだ 和漢比較文学論攷』（岩波書店 二〇〇八）一七七頁。

(31) 『文苑英華』「卷七十七」（中華書局 一九八二）に参照。

(32) 内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』（明治書院 一九七八）一八～二〇頁。

【付記】本稿は、平成一九年度総研大文学研究資料館（戸越旧館）で、中間報告研究論文発表に基づいて、査読にされた先生からのご教示を賜り書きなおしたものである。和漢比較文学に関しては、相田満先生からのご教示を頂き、あわせて心より御礼を申し上げます。

An Investigation of the *Karakagami*
 (*Tang's Mirror*) in the *Makura no Sōshi*
 (*The Pillow Book*) :
 Focusing on the Section of the “Things that Make
 Your Heart Beat Fast”

ZHANG, Peihua

The Graduate University for Advanced Studies,
 School of Cultural and Social Studies, Department of Japanese Literature

The section of the “Things that make your heart beat fast” of *Makura no Sōshi* (*The Pillow Book*) exists in the four versions of *the Sankanbon*, *the Nōinbon*, *the Maedakebon* and *the Sakaibon*. And it is known that another text exists which was corrected by Katō Bansai (1621–1674).

I intend to study the interpretation of the “happy feeling” by Bansai in the *Sei Shōnagon Makura no Sōshi Shō* (May 1674) and the “pathetic feeling” by Kitamura Kigin (1625–1705) in the *Makura no Sōshi Shun Sho Shō* (July 1674) regarding “looking into a bit dark Tang’s mirror” which have not been clarified yet within the section. I endeavor to get to the bottom of “looking into a bit dark Tang’s mirror” in “Things that Make Your Heart Beat Fast”.

I focus on expressions that differ between the text corrected by Bansai and the one corrected by Kigin, even though both of these texts were corrected according to similar versions of the text (*the Nōinbon*). I compare and inspect the differing expressions with other versions (*the Sankanbon*, *the Maedakebon* and *the Sakaibon*), highlighting the essence of “darkness” and “cloud”. Finally, I identify the causes and reasons for the interpretation of the “happy feeling” as “looking into darkness” by Bansai and the “pathetic feeling” as “cloud” by Kigin.

According to the study of expressions about the mirror in Japanese and Chinese classical literature focusing on the “dark mirror” that follows the “happy feeling”, it is clear that the “Treasure Mirror” has a dark character only in the *Gujingji* in the *Short Stories of the Tang Dynasty*. Therefore, the fact that the “Tang’s mirror” in the “Things that make your heart beat” refers to the “Treasure Mirror” in the *Gujingji* accords the original meaning of the “happy feeling” and the “things that make your heart beat fast”.

It is essential to consider the influence of Chinese classical literature, when reading difficult passages in the *Makura no Sōshi* (*The Pillow Book*).

Key words: *Makura no Sōshi* (*The Pillow Book*), *Karakagami* (*Tang's Mirror*), Happy feeling, *Short Stories of the Tang Dynasty*, *Gujingji*, Treasure mirror.